

特集 1. 基本概念の解説

第 1 回 模範的建築人とは – 行動経済学になぞらえて**

平成 20 年 7 月 9 日

□ 行動経済学とは

近年注目を集めている学問のひとつに、行動経済学というものがあります。この学問について注目すべき点は、心理学と経済学との融合が図られている点にあります。

そしてさらに興味深いことには、この学問では経済を行う主体が、**現実的で普通の「人間」**として捉えられています。この普遍的な人間像の把握のために用いられているものこそが、心理学の視点なのです。

これに対し、従来の経済学では、人間はギャンブルに興じることもなく、流行にも流されず、常に私益を追求するとされてきました。ヒトは、「超合理的」な存在（合理的経済人、ホモ・エコノミカス）であると想定されていたのです。

従来の経済学は、このように非現実的な想定をすることで、あまねく経済活動を数学的モデルを使って思弁的に解釈してきたのです。しかし、その代償として、ヒトの実態に即した日常的で「非・定量的」な経済活動の分析・解釈が困難になってしまったのです。

□ 実態が捉えられない科学と技術

科学論・技術論を展開させるために、非現実的な想定をする。そうすることで、現実的で日常的な活動が研究対象から外れてしまいがちになる。こうした問題は、何も経済学だけに限ったものではありません。なぜなら、現代アカデミズムは全般的に、定量化（数値化）可能な情報を扱おうとするからです。

残念ながら、建築学などの「人間」やその「生活」を対象とする学問分野も、**定量化可能な「非現実的人間像」**を想定する傾向があるのです。それが模範的建築人（表 1 右）なのです。

□ 模範的建築人

「ヒト = 定量化可能な模範的建築人」だとすれば、住まいはおおむね、同じく数値化可能な空間

** 初めて記事をご覧になる方は、必ず「[利用規約](#)」をご確認ください

表 1 科学・技術が想定する「定量化可能」な人間像

合理的経済人	模範的建築人
<ul style="list-style-type: none"> ・ 超合理的 ・ 超利己的 ・ 超自制的 ・ 飲酒・喫煙・ギャンブルとは無縁 ・ 流行にも流されず、衝動買いもしない 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 環境に対し常に一定の生理・心理反応をする ・ 常に健康的で高性能な空間を求める ・ 常に地球環境について憂慮している ・ 家族は常に団らんを求める ・ 家族は全員、健全・正常に成長する

技術論（材料、形状、方法、寸法等）によって解釈可能となります。こうした仮定を基づけば、やがては論点が単純・簡素化され、「家づくり論 空間技術論」となってしまうのです。

その影響もあってか、今日では例えば、「団らんを生むためには、こういうプランにすれば良い」、「失敗しない家づくりのためには、こういう材料を使えば良い」などという安易な議論が、家づくりの中心になってしまったのです。

当然ですが、ヒト = 模範的建築人ではありません。したがって、別の見方をすれば、今日では**ヒトの実態に基づかない家づくり論がされている**ともいえます。もちろん実態に基づかない住宅論が行われることは良くない事です。ただし、本当に恐ろしい悲劇は、実はこれ以外にあるのです。

□ 自分の外ばかりに関心が向く

それは、外的なもの（空間技術論など）ばかりに関心が向いて、自己の内的要素（生理・心理的要素）に目がいかなくなってしまうことです。このことが [次回](#) 説明する「外的確実性依存症」につながってしまうのです。

「定量性への依存」、「数値化可能な情報への依存」。これらは現代アカデミズムが抱える問題点なのです。しかし、こうした弊害が、いかにして我々の生活に悪影響を与えるかについては、あまり知られていないのです。

参考文献

- (1) 多田洋介. 行動経済学入門. 日本経済新聞社, 2003.
- (2) 友野典男. [行動経済学](#). 光文社, 2006.